

## 近代文化蟬学

保科 英人<sup>1)</sup>

平成 30 年 7 月 21 日付配信の日刊スポーツ記事によれば、安倍晋三首相は「首相は本年 9 月に実施される次期総裁選に出ますか？」との記者の問いに対して、「自民党総裁選出馬については蟬時雨を聞きながら考えたい」と答えたと言う。さらに同記事によれば、安倍さんは同年 1 月には「出馬表明は国会が終わり、セミの声が聞こえて来たら明らかにする」とも語っていたそうだが、もちろん、平成 30 年 7 月下旬時点で出馬を決めかねていたのが本当なのか否か、それは神と安倍首相本人のみぞ知るところであるが、我らが首相様は随分とセミ好きの御仁のようだ。何はともあれ、現代社会ではセミはこのように季節の風物詩として完全に定着している。季節ネタがよく書かれる朝日新聞「天声人語」を例にとると、令和元年の夏はセミが 2 回も取り上げられているのである（8 月 12 日及び 8 月 27 日付同紙）。

ここで時代を 150 年前に戻す。近代期（明治・大正・昭和戦前期）の新聞に登場する虫は、まずはコオロギ・キリギリスなどの鳴く虫、次いでホタルである（Hoshina, 2017, 2018; 保科, 2017, 2018）。しからばセミはどうか。結論から言うと、新聞紙上にセミが登場する頻度は、近代期は現代と比べると相当少ない。近代新聞のセミ関連記事は、鳴く虫やホタルのそれと比較して 1/10 以下と言ったところ。一方、朝日新聞の記事データベース「聞蔵 II ビジュアル」で、期間を 2009 年 1 月 1 日から 2018 年 12 月 31 日の間の十年間に指定して、以下の単語で検索をかけヒット数を比較してみた。

アブラゼミ：102 件  
 ミンミンゼミ：40 件  
 クマゼミ：102 件  
 ツクツクボウシ：75 件  
 ヒグラシ：103 件  
 ニイニイゼミ：32 件  
 ゲンジボタル：582 件  
 ヘイケボタル：213 件  
 スズムシ：214 件  
 マツムシ：73 件  
 キリギリス：179 件

ゲンジボタル及びヘイケボタルの人気ぶりがうかがえるが、近代期と比較すると、セミ類もかなり健闘していると言える。近代新聞では、セミがスズムシの半分に達する頻度で記事に出てくると到底あり得なかったからだ。

近代新聞紙上にその名をあまり現わさなかったセミたち。筆者は現代日本のセミ文化については既に語り尽した感がある（保科・宮ノ下, 2019）。そこで、本稿では近代期に時期を限定し、限られた新聞記事から、当時の日本人とセミとの関係を考察したいと思う。

### 1. 季節の風物詩としてのセミ

明治 21 年 7 月 13 日付福井新報の記者は「樹木の生ひ茂げれるところにては蟬の吟する聲を聞き初めしが（中略）蟬聲にも氣の置ける心地せらる」と、セミの合唱に思いを寄せた。近代期の新聞上では「本日今年初めてセミの声を聞きました」云々との初鳴き記事を時々見かける。例えば、明治 26 年読売新聞は 6 月 22 日付記事で初蟬を報じた。ニイニイゼミのことであろう。また「（ツクツクボウシの声を初めて聞き）風ひやゝかに残る暑さも漸く去らんとする」と、ツクツクボウシの初鳴きを初秋の到来とした記事もある（明治 30 年 8 月 26 日付東京朝日新聞）。

ただ、同じ年に“初蟬”を読者に 2 回も告げてしまったおっちょこちょいの新聞があった。郵便報知新聞は明治 25 年 6 月、「宮城内の樹林に於て蟬の聲を聞けり恐くは府下は本年の初蟬ならん」と報じた（同年 6 月 4 日付同紙）。ニイニイゼミにしては時期が少し早すぎる。記者がハルゼミの鳴き声を夏のセミと誤認した可能性があるか。次いで、同新聞は一か月後、上野、日暮里、道灌山で再びセミの“初鳴き”の記事にしてしまった（7 月 16 日付同紙）。こちらはアブラゼミかミンミンゼミと言ったところか。

また、セミと観光と絡めた記事もある。近代期、ホタルの名所における見頃の時期が新聞で報じられることはしばしばあった（保科, 2018）。セミに関しても似たような記事が、僅かではあるが存在することが判明した。

<sup>1)</sup> Hideto HOSHINA 福井大学教育学部

例えば、昭和9年夏、都新聞は伊豆の大島はヒグラシの名所である、と紹介した（同年7月24日付都新聞）。ユニークなのは明治17年の東京横浜毎日新聞で、諏訪神社での納涼の魅力を伝えると共に、セミのおしっこが降ってくるかもしれないから気を付けよ、と読者に注意を促しているのだ（同年8月3日付同紙）。

「この場所に行けばセミの声が聞けますので、ぜひ一度お越しなされませ」との行楽案内はともかくとして、セミを季節の風物詩とすること、その点は明治大正も平成令和の新聞も変わりはない。

## II. 新聞記事タイトル中のセミ

近代期新聞中に「蟬」との漢字を含む四字熟語をいくつか見出した。まずは、明治25年5月2日開会の第3回帝国議会、第一次松方正義内閣の品川弥二郎内務大臣による選挙大干渉で、政府が徹底糾弾された議会として名を残す。この議会で提出された府県監獄費国庫支弁法案は当時の民党（自由党及び立憲改進黨など）の主張である地方費の削減に繋がり、同意を得やすいものであったが（山本, 1979）、それでもそれ相応に議会は紛糾したらしい。演壇に立った白根次官の法案の説明に対し、議場は野次で大いに騒がしくなった。東京朝日新聞はそれを報じた記事タイトルを「蛙鳴蟬噪」（あめいせんそう）と付けた（同年6月10日付同紙）。無駄な騒ぎや文章を意味する四字熟語であるが、現代社会ではまずお目にかからない。

次は「蛩韻蟬語」（きょういんせんご）。明治32年7月23日付東京朝日新聞に登場した欄の名称で、現在の新聞の「天声人語」「投書欄」などに該当する名詞だ。「蛩韻蟬語」中には、「美人の乞食」とか「卑怯な親」などの市井の三面記事が並べられている。「蛩」は一字でコロギと読める漢字だ。「蛩韻蟬語」とは、どうでもよい雑報との意であると解釈すればよいのだろう。

最後は「残蟬枯葉」（振り仮名なし。「ざんせんこよう」と読むのか？）。複数の政府高官たちの秋の動向をやや茶化し気味に列挙した記事タイトルである（明治36年9月19日付東京朝日新聞）。

## III. “奇蟬” と呼ばれた茨城県北山内村のヒメハルゼミ

明治43年7月、東京朝日新聞は「片庭の大蟬」との記事を掲載した。茨城県西茨城郡北山内村片庭（現在の笠間市）にある八幡神社境内に、奇妙なセミが毎年発生すると言う。体の大きさはアブぐらいしかないが、声が大きいため、地元の人々は「片庭の大蟬」と称している。特に今年は大蟬が大発生したので、近隣の人が大挙して見物に押し寄せている、とある（同年7月22日付同紙）。

現代人はこのセミがヒメハルゼミであることを承知しているわけだが、明治末時点では片庭の個体群は正体

不明とされていた。確かに、当時ヒメハルゼミの存在自体は既に知られていた。しかし、ほぼ同時期に出版された西村真次『蟬の研究』によると、ヒメハルゼミの分布地としてあげられているのは、新潟、千葉、福岡の三県のみである（西村, 1909）。よって、明治時代の北山内村の人々や新聞記者が片庭のセミを奇妙奇天烈な昆虫と見なしても、決して不思議な話ではないのだ。片庭のヒメハルゼミが国の天然記念物指定を受けたのは昭和9年であるが（加藤, 1981；笠間市史編さん委員会編, 2004）、その僅か6年前に出版された『西茨城郡郷土史』中でも、片庭のセミは“奇蟬”と呼ばれており、ヒメハルゼミとの種名は文章中に記されていない（埜, 1928）。『西茨城郡郷土史』では「一蟬音頭をとれば全蟬亦鳴く」と合唱性について科学的に正しく言及されている一方で、「何人も樹にあるを見しことなしといふ」と何かしらの神秘性を強調した記述がなされている。

何はともあれ、「奇妙なセミがたくさんいる」との風評で大勢の人々が北山内村に集まったこと、人々のセミへの関心の高さがうかがわれる。

## IV. 政治家とセミ

本稿冒頭で紹介した安倍首相が「蟬時雨うんぬん」と発言したのは、あくまで季節の風物詩としてのセミを念頭に置いたものである。安倍さんが生き物のセミ自体を好きかどうかはまた別である。しかし、近代期にはセミが大好きで虫捕りに励んだ大臣級の政治家がいる。その名を奥田義人（1860-1917）と言う。奥田は文部大臣、司法大臣、東京市長、衆議院議員、勅撰貴族院議員などを歴任した大物政治家であるが、その一方で、夏になると近所のガキどもを引き連れて、セミ捕りを楽しんだ。奥田のこの趣味については江崎悌三の随筆「私の余技 余技の中の一番のげてもの」の中で言及されている（江崎, 1958）。奥田の一風変わった性癖は新聞記者の関心を大いに引いたようで、大正4年奥田が東京市長に就任した際、「蟬の敵奥田新市長」とのユーモラスな見出しがデカデカと載っている（大正4年6月13日付東京朝日新聞）。記事によれば、奥田は靖国神社や五番町あたりに散歩に出かけ、子供を見かけると「お見せ叔父さんがセミを捕ってやる」と話しかけ、首尾よくセミが捕れたら、ニコニコと心から嬉しそうな顔をしたと言う。なお、奥田のセミ捕り好きは明治40年の『昆蟲世界』（第十一巻百二十一号）でも紹介されている。

次は歴史学者の久米邦武（1839-1931）東京帝大教授の逸話。久米は佐賀藩士の家の生まれで、必然的に同藩出身の大隈重信の知遇を得ていた。ある時、久米は大隈邸を訪問したが、あいにく大隈本人は不在。そこで夫人が応対したが、なぜか久米は熱心のセミの話をし始めた。「某（それがし）セミの声をご夫人にお聞かせ申さん」

と、何十種類ものセミの鳴き声の真似を延々としてみせた。夫人はやがて辟易してしまい、「早く止めよ」と心に念じていたが、久米のセミ談話は結局1時間半にも及んでしまった(明治38年9月4日付読売新聞)。大隈重信は明治大正期の在野の昆虫学者の名和靖の支援者の一人であり、昆虫に対してもそれなりの関心を持っていた(保科, 2019a)。大隈は帰宅後夫人から久米のセミ談義を聞かされて、どのような感想を抱いたであろうか。

### V. 空虚との意の「空蟬」

俳句や詩の世界においては「空蟬」は過ぎ去りし夏への郷愁の表れである。一方で、通常生活における「空蟬」「セミの抜け殻」との単語は空虚なもの、中身がないもの等々、やや否定的に用いられる場合が多い。例えば、東京朝日新聞は帝国議会における関東大震災後の復興計画法案審議関連記事に「空蟬の復興計画」と批判的な見出しを付けた(大正12年12月22日付同紙)。関東大震災が初秋の9月1日に発生したことを念頭に置いた見出しかどうかは定かでない。

次に第二次世界大戦勃発後の昭和15年。読売新聞は防備兵力を減じたシンガポールを貶し気味に「蟬の抜け殻」と呼んだ(同年8月4日付同紙)。日本はまだ参戦していない時期であるが、国民の間では十二分に反英意識が高まっている。「蟬の抜け殻」とは、そのような国民感情を背景にしていると言えそうだ。もっとも、現代で同様のことを表現するなら「もぬけの殻」であって「セミの抜け殻」ではないような気がする。

最後に一風変わった「空蟬」を紹介したい。筆者は、近代日本海軍は昆虫の名前を冠した兵器を持たなかった、と指摘したことがある(保科, 2016)。しかし、幕末諸藩が所有した洋式艦船には昆虫の名前が用いられていたものがある。薩摩藩の「胡蝶」、土佐藩の「蜻蛉」「胡蝶」、そして「空蟬」がそれに該当する。薩摩藩は「胡蝶」のほかは、「翔鳳」「青鷹」「白鳳」など、幕府は「蟠龍」「龍翔」「長鯨」などの諸艦船を配備していた。幕府はもちろん、薩摩藩も「胡蝶」を除けば勇ましい名称を軍艦に付けていたわけだが、土佐藩の命名の発想は現代人の目には奇異に映る。と言うのも、同藩所有の洋式艦船は「空蟬」以外には「羽衣」「乙女」「横笛」等々であり、少女趣味と言うか文弱と言うか、敵艦の砲撃であっけなく沈められそうな艦船名が並ぶのである。これは土佐藩の趣味としか呼びようがない。ちなみに、幕府海軍の最強艦の「甲鉄」が500馬力、700トン(注、「甲鉄」は後に薩長新政府が接收する)、薩摩藩の最大艦船の「春日」が300馬力、1015トンである。一方、土佐藩の「空蟬」は150馬力、146トンなので、当時の基準では小型洋式艦船の部類に入ると言えるだろう(神谷, 2018)。

### VI. 近代日本人も不思議に思った夜に鳴くセミ

現代社会の町中で暮らしていれば、真夜中に街灯の近くでセミが鳴いている風景に出くわすことは珍しくない。これは都市化によるセミへの悪影響の一つで、日本セミの会の林正美・埼玉大学教授(当時)は「本来昼間しか鳴かないセミが夜間にも鳴くのは、都市部の夜の気温が高いこと、明るい街灯があることが原因と考えられる」とコメントしている(平成17年9月9日発行『週刊朝日』)。

しかし、近代日本でもセミが異常な時間帯に鳴く現象は既に知られていた。まずは大正13年。東京朝日新聞の記者が「セミは夜に鳴かない」と書いたところ(記事の掲載日不明)、「そんなことはない。セミは夜にも鳴く」との投書が3~4通届いた(同年7月9日付同紙)。さらに、数日後には新たに20通もの同様の投書が寄せられた(同年7月13日付同紙)。しかも、差出人の住所は山形、新潟、佐賀などの地方であって、必ずしも東京や大阪などの大都市ではなかったと言う。

そして昭和13年、新聞読者からの「なぜセミは夜にもジージー鳴くのですか?」の質問に対し、昆虫学者の古川晴男は「セミが鳴くのは一定の光の強さが必要である。よって、セミの夜鳴きは人家近くに灯火があるから起こるのであろう」と回答している(同年9月2日付東京朝日新聞)。「ジージー」との鳴き声から、このセミはアブラゼミと思われる。このことから、戦前の時点で一般市民でも知りうる頻度でセミの夜鳴きは観察されていたと見るべきだろう。

### VII. セミ捕り中の人身事故

明治大正期には、ホタル狩りに夢中になってしまい電車にひかれて轢死したとか、トンボを捕っていた少年が誤って池に落ち、溺死したとの悲報記事が散見される。そして、残念ながらセミ捕り中の子供の死亡事故もいくつか存在する。明治42年、兄が石燈籠に上ってセミを捕っていたところ、誤って石燈籠を倒してしまい、側にいた弟が圧死した(同年8月15日付東京朝日新聞)。なお、読売新聞では石燈籠に上っていた子供の方が転落して頭を打って死んだとしており(同年8月14日付同紙)、どちらが真実かはわからない。明治44年には少年がヤナギの木に登ってセミを捕っていたところ、木から落ち、たまたまそこにいた犬に左足をかまれて怪我をした(同年8月15日付読売新聞)。幸い、大きな事故には至らなかったようだ。

昭和に入っても事故は続く。昭和2年にはセミ捕りをしていた幼女が堀の中に落ち溺死した(同年8月19日東京朝日新聞)。昭和7年には樹上でセミを捕っていた少年が電線に触れて大けがをした(同年8月21日読売新聞)。昭和15年にはセミ捕り中の少年が古井戸に

落ちて溺死した（同年8月13日東京朝日新聞）。

上記のようにセミ捕り中の事故を並べると、いくつか気付くことがある。まず、新聞記事に現れる人身事故は明治40年代以降であるが、これは別に明治後半以降に子供がセミを捕り始めた、と言うわけではあるまい。新聞紙は年代が進むほど紙面数が増える傾向があり、単に記事の掲載量が増えて、その結果、市井の悲劇が記事として残るようになったからと考えられる。次に、筆者の幼少時代を含めて、現代では子供が木に登ってセミを捕ることはあまりないように思える。大体地上部で網を振り回すだけである。一方、近代期は子供が木登りすることに躊躇いがなかったから、それ故に人身事故も頻発したのかもしれない。

### VIII. セミにまつわる3面記事

前章の悲惨な死亡事故とは全く話は変わり、ここではセミに関連する長閑な3面記事を2つ取り上げる。まず、明治26年銀座の菓子屋の古月堂は宮中の歌題「森蟬」に擬えた美麗な珍菓を売り出した（同年8月13日付読売新聞）。現在でもセミをモチーフとした菓子パンは存在する（保科・宮ノ下, 2019）。残念ながら、この新聞記事には絵も写真もないので、「森蟬」に因んだ珍菓がいかなる姿形のものであったか、それはわからない。

次はセミが貴重な文鎮に化けたとの笑い話。東京府下の貧しい農家の三木彌三郎宅の戸棚から光り輝く文鎮が見つかった。彌三郎には身に覚えがない代物で、「盗賊が我が家に放り込んだものか」と疑い、警察に届けようとした。すると、長男の彌吉が「これは自分の大事なオモチャだ。夏に森の中でセミを捕っていたら、子供がやって来て、セミを欲しがった。そこで自分は子供が持っていた文鎮とセミを交換したのじゃ」と言い張った。結局、彌吉のセミと文鎮を取り換えた子供の素性がわかり、彌吉の話は事実であると判明した。文鎮は無事三木家の重宝となりました、めでたしめでたしとのハッピーエンドになったのである（明治26年12月2日付読売新聞）。

### IX. セミを捕るべきか捕らざるべきか

昭和7年、映画監督の島津保次郎（1897-1945）がロケのため江戸崎に來訪した時のこと。いざ撮影を始めようとしたら一斉にアブラゼミが鳴きだした。猛烈な雑音に怒り狂った島津は、「セミのヤツら覚えておれ！」と大木に登ってセミ捕りを始めた。女優たちがやんやと声援を送る中、助監督らも続き、スタッフ総出のセミ捕りとなった。さらに島津は「1頭5銭でセミを買い上げるぞ」と発破をかけた。すると、それを伝え聞いた村の子供たちまでもが集結し、セミ捕り大会となった。当時の東京朝日新聞の朝刊が1部3銭と言う時代である。子供たちにとって1頭5銭は魅力ある小遣い稼ぎだっ

たに違いない。結局、島津は5円ものポケットマネーの支出を余儀なくされてしまった（昭和7年8月20日付読売新聞）。

上記の島津監督のセミ買い上げ騒動はただの笑い話にすぎないが、害虫駆除の一環としてセミを捕るべし、との記事が掲載されたことはある。例えば、昆虫学者の古川晴男は新聞に「セミは色々な木の汁を吸って枯らしますから、たくさん捕ってください」との談話を読売新聞に寄せたことがある（昭和15年7月28日付同紙）。現代人からすれば、騒音問題は別にして、セミを害虫と見なす発想はあまりない。しかし、農業上セミが害虫化することはなくはない。やや古い害虫リストだが、梶原ら（1986）はアブラゼミをリンゴの害虫、ニイニゼミをビワの害虫としてあげている。

戦後の70年代、昆虫採集に対して「虫捕るべからず」との逆風が吹いたことは、高齢の虫屋の方々の記憶に残っているだろう（例えば、青柳, 1975）。現在でも動物愛護の観点から昆虫採集に対して批判的な動きはある。しかし、大正時代の時点で既に「虫が可愛そうだから虫捕りをするな」との思想は存在した。大正11年、小石川の淑徳高等女学校では有志が「慈愛の會」を結成し、東京全市の小学校にセミやトンボを捕らないようにとの宣伝活動を開始した（同年6月20日付読売新聞）。彼女らの論理では確かに昆虫保護との目的も指摘されているが、前面に押し出されたのは、組織名が示す通り慈愛の精神である。大正11年6月と言えば、シベリア出兵の最中であり、極東ロシアのニコラエフスク在住の多くの日本居留民が虐殺されて2年後、そして4か月後には全シベリアからの日本軍の撤兵が迫っている時期にあたる。そのような時代の風潮を受けてであろうか、「慈愛の會」はセミやトンボの羽や足をむしる遊びを「まるでパルチザンの行為」とまで喝破している。なお、『淑徳五十年史』には同校が設立した各種の会名が記されているが、「慈愛の會」の名は見当たらない（淑徳高等女学校編, 1942）。筆者の憶測ながら、「慈愛の會」はあまりに言動が過激であったためキワモノ視されたのか、あるいはあくまで有志による活動であり、同校が正式に認可した団体とはされていなかったから、学校の正史には記載されなかったのか・・・？

同じ大正11年には子供に残忍性を受け付ける昆虫採集はケシカランと、農商務省に蜻蛉保護法令を出すようにと陳情するお爺さんも出現した（大正11年8月3日付読売新聞）。これらの女学校生徒や老人の活動が当時の昆虫採集に与えた影響は皆無と言ってよいだろうが、この時代に既に動物愛護の精神から採集行為への批判があった、との点は昆虫学史上の一つのトピックではある。

## X. 考察. 近代日本人はセミをどう見ていたか?

明治20年代半ばの東京で上野や日暮里の森で捕られたセミが売られていたとの記録がある。1頭1厘5毛～3厘くらいの価格であったと言う(明治25年8月25日付読売新聞)。当時の東京朝日新聞1部の価格が1銭5厘なので、現在の貨幣価値でセミ1頭数十円程度と言ったところか(1銭=10厘)。これら売り物のセミが何を目的とした商品であったかは不明である。いずれにせよ、筆者が見つけ出したセミが売られていたとの新聞記事はこれだけだ。

本稿冒頭で述べたように、近代期の新聞に登場するセミ関連記事は決して多くない。現代の新聞の方がよほどコラム等で、セミは高頻度で記事になっている。この点は、現代日本のペット昆虫の代表格であり、最も人気があるカブトムシとクワガタムシも同様である。カブト・クワガタは近代期の新聞上であまり記事になっていないのだ(保科, 2019c, 2019d)。カブト・クワガタに対する嗜好は大東亜戦争を挟んで大きく変化している一面が確かにある。

近代日本人が鳴く虫やホタルをことさら好んだ要因は、1) 近代日本人は情緒対象となる虫に強い関心を持ったこと、2) 飼育下でも鳴き声や発光が楽しめたこと、の2つが考えられる。言うまでもなく、カブト・クワガタは両者に該当しない。セミは何と(1)の要件を満たしている。だが、近代日本人は鳴く虫、ホタル、カジカガエルなど、とにかく一般家庭で生き物を飼育することにこだわった(保科, 2017, 2018, 2019b)。セミを捕ってきて、虫籠に入れておくのは容易でも、エサを与えて家の中で鳴かすのは至難の業である。また、仮に鳴かせることができたとしても、スズムシやコオロギとは異なり、セミは声量が大きすぎて、しんみりと鳴き声を鑑賞するには程遠い。「飼育下では鳴き声を楽しめない」とのセミの生物学的特徴が、人々の関心を薄めてしまったとは考えられまいか。

近代日本のセミは子供たちの格好の遊び相手ではあったが、大人たちからすれば季節を告げる昆虫に過ぎなかった。時折情緒を感じさせるが、かと言って鳴く虫やホタル、カジカガエルほど大の大人が夢中になる虫でもない。季節の風物詩であるセミ。新聞記事になる頻度では近代と現代で差があるが、セミに対する見方そのものは、明治大正の日本人も平成令和の日本人も、似たようなものである。これが筆者なりの結論である。

## XI. 参考文献

- 青柳昌宏, 1975. 自然保護教育の歴史と現状, 今後の課題. 日本生物教育学会研究紀要: 1-32.  
江崎悌三, 1958. 江崎悌三随筆集. 北隆館. 345 pp.  
塙泉嶺, 1928. 西茨城郡郷土史. 政教新聞社. 538 pp.

- Hoshina, H., 2017. The Prices of Singing Orthoptera as Pets in the Japanese Modern Monarchical Period. *Ethnoentomology*, 1: 40-51.  
Hoshina, H., 2018. The prices of fireflies during the Japanese modern monarchical period. *Ethnoentomology*, 2: 1-4.  
保科英人, 2016. 近代海軍における日米両国の昆虫観の比較. *きべりはむし*, 39 (1): 36-37.  
保科英人, 2017. 鳴く虫の近代文化昆虫学. 日本海地域の自然と環境, (24): 75-100.  
保科英人, 2018. 明治百五拾年. 近代日本ホタル売買・放虫史. 伊丹市昆虫館研究報告, (6): 5-21.  
保科英人, 2019a. 明治40年代「名和靖日記」. 科学史研究, (58): 39-55.  
保科英人, 2019b. 文化蛙学. 近代日本人とカジカガエル. 日本海地域の自然と環境, (25): 127-136  
保科英人, 2019c. 近現代文化鯉形虫学. さやばね, (35): 12-20.  
保科英人, 2019d. 近現代文化兜虫学. さやばね, (36): 1-10.  
保科英人・宮ノ下明大, 2019. 大衆文化のなかの虫たち 文化昆虫学入門. 論創社. 318 pp.  
梶原敏宏・梅谷献二・浅川勝, 1986. 作物病害虫ハンドブック. 養賢堂. 1446 pp.  
神谷大介, 2018. 幕末の海軍. 明治維新への航跡. 吉川弘文館, 東京, 272 pp.  
笠間市史編さん委員会編, 2004. 笠間市史. 地誌編. 笠間市. 438 pp.  
加藤正世, 1981. 復刻 蟬の生物学. サイエンティスト社. 319 pp.  
西村真次, 1909. 蟬の研究. 博文堂. 202 pp.  
淑徳高等女学校編, 1942. 淑徳五十年史. 淑徳高等女学校. 168 pp.  
山本四郎, 1979. 日本政党史(上). 教育社. 243 pp.